

# アフターコロナを見据えて

群馬県小学校長会長 小林 克宏



令和2年2月27日の夕方、当時の安倍首相が「来週3月2日から春休みまで、臨時休業を行うよう要請します」と、緊急の記者会見を開いて発表したことをニュースで知りました。あまりにも突然の出来事に、耳を疑ったことを今でも鮮明

に覚えています。

あれから3年が経過しましたが、いまだに新型コロナウイルス感染症の影響は続いています。この間、臨時休校や分散登校を経験し、「新しい生活様式」が定着する中で、学校生活においても不自由な生活を余儀なくされてきました。授業参観や家庭訪問などの学校行事や、子どもたちにとって貴重な経験の場である修学旅行や林間学校などの泊を伴う学校行事を中止しなければならない時期もありました。

そのような中でも、各学校では「コロナだから…できない」ではなく、「コロナだけど…何ができるか」を、校長のリーダーシップの下で真剣に考えてきました。「ピンチはチャンス」であると前向きにとらえ、小学校長会においても、理事研修会等の機会を活用して様々な情報交換を行ってきました。学校では校長が最終的な判断を迫られる難しい場面が多くありましたが、その判断材料として、県内の他校や他地域での事例がとても参考になったことと思います。まさに校長会の「存在意義」を実感した出来事でした。

また、このコロナ禍の臨時休校を契機に子どもたちの学習保障が大きな課題となり、オンライン授業

が一躍脚光を浴びることになりました。全国的にGIGAスクール構想が一気に加速されて1人1台端末が急遽整備されました。時を同じくして本格実施となった学習指導要領の趣旨を生かすべく、授業でいかにICTを活用するかが課題となり、個別最適な学びや協働的な学びの実現に生かされることが急務となっています。

さらに、この1人1台端末の配付によって、これまで紙面で配付していた通知等を配信したり、欠席連絡や健康観察、学校評価アンケートなどをタブレットを介して行うようになるなど、学校における働き方改革の推進にも一役買う結果となりました。昨年12月に県教育委員会より出された「提言R5」では、廃止や縮小などが可能な学校業務が具体的に明示されましたが、これらのことも踏まえて「コロナ禍」から「コロナ下」へと移行し、今後やってくるであろう「アフターコロナ」の学校運営をどのように考えるかが、校長として喫緊の課題となることでしょう。

こうした中、私たち校長は、まずは足元である学校や地域の実態をしっかりと見つめるとともに、広い視野から新たな学校課題の解決に向けて一步を踏み出さなければなりません。

そのために重要な役割を果たすのが、群馬県小学校長会であり、国や県との連携や情報提供、各地域の取組等の情報交換、調査研究や研修等が、各学校の学校経営の一助となることを願って止みません。

いつか時代が移り変わって、コロナ禍のこの困難さを「あんなこともあったよね」と、思い出話に花を咲かせる「アフターコロナ」の日が来ることを心から願っています。